O1-029

保育所看護職の役割取得過程 －職業的アイデンティティの形成と保育所看護に求められる知識や技術－

福永 知久

元首都大学東京　人間健康科学研究科　看護科学域

【目的】
保育所で働く看護職が、看護職としての役割を果たしていると実感するまでの経験とそのプロセスを明らかにすることである。

【方法】
研究手法としてグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。所属機関の倫理委員会の承認を得て、保育所で働く看護職9名を対象に半構成的インタビュー調査を行い、逐語録を作成した。分析では、データを内容によって切片化し、切片ごとにプロパティ（特性）とディメンション（次元）を抽出しラベルを付けた。そのラベルを類似した一つの概念にまとめ、各切片のプロパティ、ディメンションを用いて概念を理解し、カテゴリー名をつけた。次に、これらのカテゴリー（以下≪ ≫で示す）を、状況、行為/相互行為、帰結で構成されるパラダイムに分類し、現象（以下【 】で示す）を把握した。

【結果】
分析の結果、【保育所看護職の役割取得過程】という現象が明らかとなった。この現象は保育所に入職した看護職が、≪保育所における不明確な立場≫という状況から、≪見出された看護職としての姿勢≫、≪保育所を離職したい気持ちの高まり≫という帰結に至るプロセスを示したものである。その過程では≪置かれた状況の把握≫、≪保育の中に敷く看護のレール≫、≪目を注ぐ子どもの健康≫、≪作られる結びつき≫という4つの行為/相互行為が見出された。

【考察】
≪見出された看護職としての姿勢≫というカテゴリーは、医療機関での就業を経て保育所に入職した看護職が、医療機関とは異なる職業的アイデンティティの再構築を示すカテゴリーである。その方法は、3つのバリエーションがあったが、それらに見出された共通点として、家族と共に子どもの健康維持と成長発達に貢献するという姿勢が示された。つまり、【保育所看護職の役割取得】という現象は、看護職が保育所で職業的アイデンティティを形成するプロセスであった。また、その職業的アイデンティティを形成する過程で明らかになった≪置かれた状況の把握≫、≪保育の中に敷く看護のレール≫という2つのカテゴリーは、保育所の組織全体の業務を把握し、看護業務の遂行をマネジメントしていることが示された。それぞれのカテゴリーの意味を考えたことで、保育所で看護を実践するためには小児看護に加え看護管理の能力が必要とされることがわかった。今後、保育所に入職する際に、看護管理能力が発揮されるような教育や導入が必要であることが示唆された。

O1-030

入院して計画手術を受けた子どもの思い

森 浩美[1]、佐々木 俊子[2]、岡田 洋子[1]

[1]旭川医科大学　医学部　看護学科、
[2]名寄市立大学　保健福祉学部　看護学科

【目的】
本研究の目的は、入院して手術を受けた子ども（以下、子ども）の入院手術に関する思いを明らかにすることである。

【方法】
子どもと親の同意を得て、半構成化面接を行った。データは質的記述的に分析し、小児看護学教員２名と臨床看護師１名で結果の妥当性の確保に努めた。研究は研究者の所属大学倫理委員会と病棟看護師長の承認を得て実施した。

【結果】
子ども6名に面接を行い、年齢は6 ～ 12歳（平均8.6歳）、疾患は唇顎口蓋裂や斜視など、入院期間は平均9日間、面接所要時間は平均28分であった。　子どもの思いは、65コード、18サブカテゴリー、7カテゴリーで構成され、以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〔 〕で示す。子どもは入院手術前の〔説明は覚えていない〕〔今後のことを見通せる説明が欲しい〕と【十分に理解できなかった入院手術前説明】を受け、〔入院手術はしたくない〕〔入院手術はやるしかない〕という両方の思いから【できればしたくないが拒否できない入院手術】と思っていた。入院後は〔辛かった入院手術〕〔自分らしく過ごせない入院生活〕と【辛くて嫌だった入院手術】と感じる一方で、〔入院仲間や好きな看護師と過ごす入院生活〕〔家族が会いに来てくれた〕ことに満足し〔離れがたい環境と入院仲間〕として【好きな人々に囲まれ過ごした入院生活】を実感していた。また、〔入院手術は可もなく不可もなく〕〔嫌なことも頑張った〕〔辛くても自分なりに考え行動した〕と【頑張った自分】を捉え、〔無事に終わった手術〕〔手術後の回復を実感する〕と【手術が終わり落ち着く気持ち】にも至っていた。そして、〔退院ができても体調に心配がある〕つつも、〔回復のために退院後も気を付ける〕〔自分にも分かる今後の治療計画〕〔退院したらやりたいことがある〕と【退院後の自分】にも思いを馳せていた。

【考察】
子どもは説明を十分に理解できなくても入院手術は拒否できないと感じていた。そして、辛い体験を乗り越えながら支援してくれた人々や頑張った自分を捉え、退院後の自分にも思いが及んでいた。子どもは拒否したい気持ちを抑えて入院手術に臨んでいるため、〔辛くても自分なりに考え行動した〕体験や〔手術後の回復を実感する〕思いが増えるように、看護師は子どもの気持ちを十分にくみ取り、困難に挑戦できていることを褒め、入院手術が辛いだけの体験とならないようにすることが重要と考える。本研究は平成26年度公益財団法人ユニベール財団の助成を受けて実施した。

Presented by Medical*Online